

研究の窓

「共」的セクターと女性の社会的活動

戦後日本の経済発展が政官財の癒着構造によって主導され、われわれ国民の生活もその構造のなかに組み込まれ、かつその構造に依存してきたことが、今回の金丸ヤミ献金事件をとおして、いままで以上に明確になった。その癒着構造によって主導され演出されてきた経済大国としての「豊かさ」は、過激な競争に打ち勝つための勤労者の長時間労働、単身赴任、そして過労死という犠牲のうえになりたってきた。政官財の癒着構造によって進められてきた経済優先主義が、国民生活のための社会資本や社会保障制度の充実を先送りしてきたのみならず、人々から真に生きることを意味を奪ってきた。ようやく人々は経済優先主義が真の生活の豊かさを実現するどころか、それを破壊してきたことに気づき始めた。本当の生活の豊かさを実現するためには、社会関係から突出し社会関係を破壊してきたのみならず生態系・生命系をも危機に陥れている、異常に肥大化してしまった経済システムを、社会関係を復権することでそのなかに再び埋め込むことが必要である。

ここでいう社会関係の複合体が「共」的セクターとしての〈社会〉である。それは私企業の複合体である「私」的セクター、および国家や自治体や公共団体などの複合体である「公」的セクターから自立した市民による経済的・政治的・社会的・文化的活動領域の複合体である。この「共」的セクターの構成原理が、人々のボランティア・アクションにもとづくネットワークである。ボランティア・アクションとは、「私」的および「公」的セクターから自立した自由な意思決定にもとづく行為であり、そのような行為間に特定の主題について言語的・身体的・感性的レベルでの対話的コミュニケーションが行われ協同行為が遂行されるとき、ネットワークについて語りうるのである。ネットワークは、社会学でいう第1次関係でも第2次関係でもなく、1.5次関係を理想とする。それは、互いに他者のことを十分に配慮しながら、さわやかにゆるやかに、しかも相互にボランティアに自己決定したことは責任をもって協同して遂行しあう関係であり、その協同関係のなかで互いの個性を高めあうことのできる、そのような関係性である。

こうした「共」的セクターを拡大することでポスト産業社会のコミュニティ形成をめざして運動している生活協同組合に、とりわけその一つである生活クラブ生協の運動に注目して研究をすすめてきた（佐藤編著『女性たちの生活ネットワーク』文真堂、1988）。生協は、産業の競争と効率の論理によってではなく、生活者の自立と連帯の論理によってオルタナティブ社会をめざして活動している事業体であり、かつ運動体である。われわれが生活クラブ生協に注目してきたのは、その運動の方向にポスト産業社会の可能性を見ることができると考えたからである。生協は

家庭を守る「主婦」の活動として出発した。活動を展開する過程で、主婦たちはさまざまな社会的問題、たとえば食品の添加物や放射能汚染の問題、ゴミ問題や環境問題などにぶつかり、これらの問題に積極的に取り組むことをとおして自立した社会的活動女性へと自己変容していったのである。こうした女性たちが、生協を基盤に自己資金、自己労働、そして自主運営による女性の新しい働き方としてのワーカーズ・コレクティブを多くの分野で形成し、雇う雇われる関係を越えた働き方をしている。また政治を生活者のための政治にするために議会に議員を送り込む代理人運動を展開し、多くの女性議員を実現させてきた。

さらにまた、生活クラブ生協は、福祉活動や共済活動にもりだし、神奈川では福祉クラブ生協とコミュニティクラブ生協を独立させて単協化した。その福祉クラブ生協やコミュニティクラブ生協を担うのは、女性組合員であり女性ワーカーズ・コレクティブである。また、東京でも社会福祉法人を設立して地域の高齢者へのデイサービスを始めたり、神奈川では特別養護老人ホームの建設がすすめられている。

これらの女性組合員を中心としたさまざまな社会的活動は、消費財の共同購入という事業活動を組合員のボランタリーな協同のネットワークによって遂行する過程で考えられ実行に移されてきたのである。生協活動をとおして多くの女性が、いま地域でさまざまな活動に携わることで「共」的セクターの活動領域を拡大しながらネットワーク型コミュニティを形成しつつある。さらに彼女たちは、これらの社会的活動をとおして女性の自立とは何かを問い、フェミニズムとも接点をもつことで、また新しい活動視点を取り入れつつある。ポスト産業社会は女性によって拓かれつつある。

佐 藤 慶 幸

(さとう・よしゆき 早稲田大学教授)